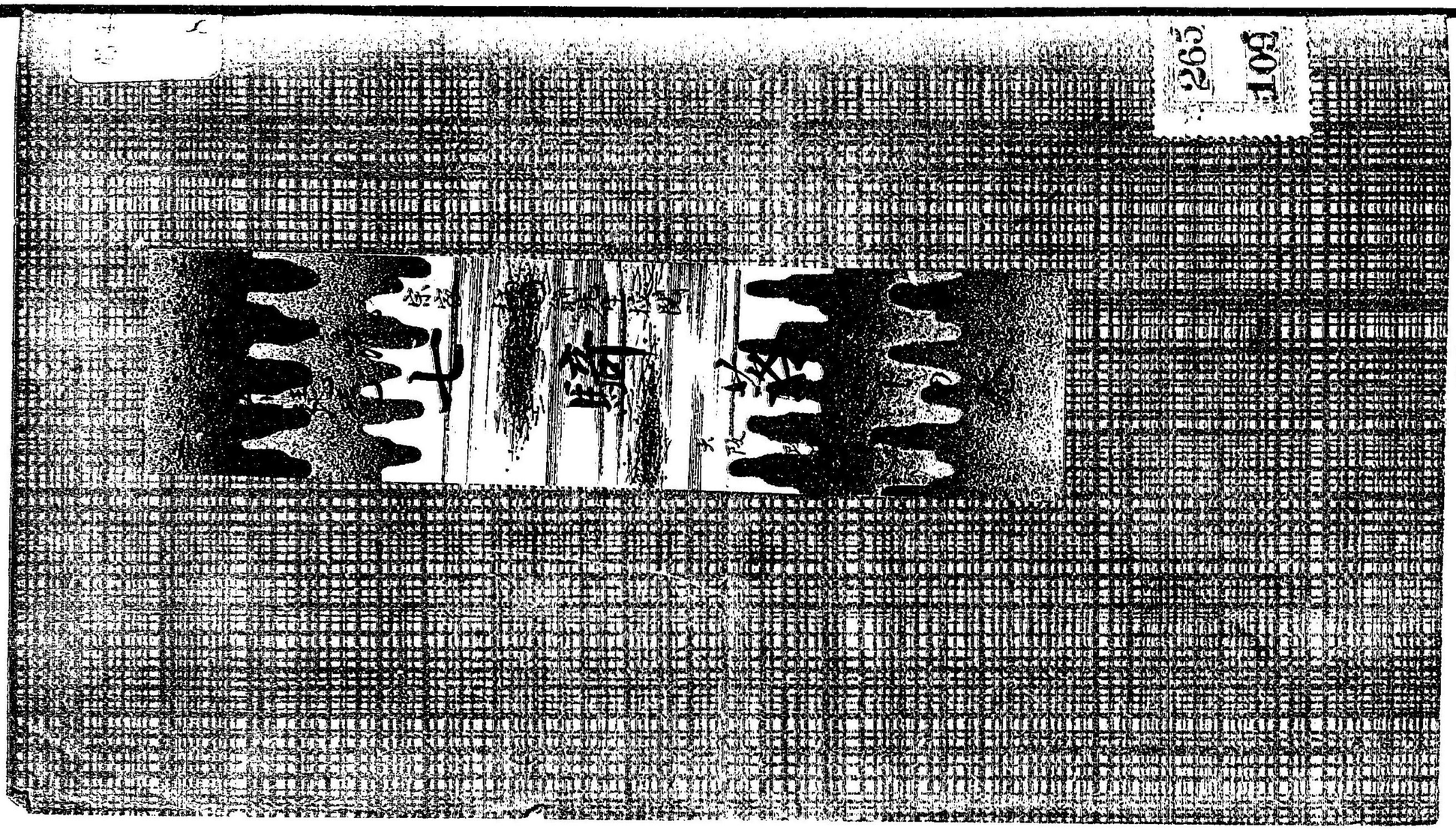

孟子中庸

意緒

明治
43. 6. 27
内務

己酉初夏

柳江題

九州東雲
東京義郎

七騎落 下の巻

洞陽作

やがては征夷將軍と
一天四海を手に握り

府を鎌倉に開きます
頼朝卿の御前途を

神もあはれみ給ふらん
折から昇る朝日旬氣

雲路はるかに漕ぎ寄する
舟は味方かはた敵か

落人の事なれば
心置るゝならひとて
深く忍ばせ給らせて
舟も次第に近づけば
三浦の舟と知られけり

松吹く風や波の音も
御舟の底に我君を
様子窺ひ居たりしに
見ゆるは笠の印にて
義澄舟より聲をかけ

其御舟に居給ふは
君か御舟か如何にぞと
我君爰にまゝますと
亂れたる世の人心
義澄とても許されず

岡崎殿にはあらざるか
尋ぬる言葉に岡崎は
言はんとせしが待て暫し
量り難きは胸の中
明さで置くぞよかりんと

胸を定めて岡崎が
行方尋ねて待るぞと
いたく心をたきつ波
何思ひけん義澄は
雙手を合せ目に涙
我々とても我君の
いへる言葉も船の中
寄りつく島もなかりけり
西の方へと打向ひ
何しに角も我々は
果敢なき身とはなりつるか
今は何處にたはすらん
つらき縄目の恥しめに
父の言葉に背くとも
續かん限り働きて
親には陸の生き別れ
定めて敵に生け捕られ
かゝる憂き身と知るならば
城を枕に打物の
死すべきものを生憎に

尋ぬる君に遇ひもせず
義澄涙を振り拂ひ
早まりなせぞ三浦殿
なほ一ますこそ自害せれ
板子を取りて實平が

生甲斐なきぞうたてける
既に覺悟と見ければ
義盛殿もとも〳〵に
我君爰にまゝますと
君を上座に誘へば

君は涙にくれ給ひ
思ひつらき今の樣
子に別るゝの憂き事も
鐵より固き主從が
もゝひの綱も結ぼれて

言葉もうちも濕み聲
親を捨つるの悲しみや
我に盡すの忠義心
深き緣しの舟と舩
共に嬉こぶ其中に

沈み勝なる實平を
實平殿に参らせん
人は誰ぞやいにしへ日に
後は定めて敵陣に
彌太郎遠平なりければ
見るより和田の義盛が
物こそあれと連れ来る
真鶴の濱に別れにし
討死せしと思ひて
實平夢か現つかと
思ふ許りの嬉しさに
鎧の袖や濡るらん
のふ和田殿よ御身には
救ふてこそに連れられ
義盛容貌を改めて
覺ずず落す一ト雫
實平さう〳〵面を上げ
いかになーてか遠平を
語り給へと云ひければ
去ぬる二十まり八日の日に

君の行方を尋ねんと
若武者一騎景親が
引揚げ兼ねし其様を
遠平殿にてありければ
知る者なきを幸ひに
汀の方へ来にければ
手勢の為めに圍まれて
駒駈けよせてよく見れば
大場が勢に我顔を
急ぎ馬より飛びたりて
生捕る體にみてなして
詫す噺の長きうち
夕陽次第に傾きて
忽ち消ゆる西の海
東の空の東雲に

これまで御連れ申しぬと
永くもあらぬ秋の月は
紅雲四方に満ちみつも
日も入相の其様が
白き旗風靡かせて

登る源家の勢ひは
書て残せる七騎落
忠義の程こそ自出度れ

末の世までの語り草
忠義の程ぞ雄々しける

明治四十三年六月十日印刷
仝　四十三年六月二十五日發行

發行兼編輯人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　有村彌四郎
印刷人　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井護三郎　電話東四五五九番
印刷兼發行所　大阪市東區和泉町二丁目一番地　藤井改進堂　長電話東二七〇番

265
109